

日米における男女共同参画の発展

早速、私事から始めて申し訳ないが、最近70歳になり、その祝いに何名かの外国人が来て、講演をしてくれた。その中に二人の女性研究者がいた。一人はハイデルベルグ大学の教授で、つい最近までドイツ物理学会の会長を務めていた人である。もう一人は、Stony Brookのニューヨーク州立大学Distinguished Professorで米国アカデミー会員でもある。二人の女性とも、素晴らしいキャリアの方が、一人は助教授になる頃から何度も私が推薦状を書いてきた外国人で、もう一人は学生時代から良く知っている外国人である。そのため、物理だけでなく、バカなことを言い合ったり、食事を共にする友人でもある。

なぜこんな話から始めたかという、実は、この二人に共通点があるからである。彼女らは、我々の分野で膨大なデータを集め、そこから一つのシステムティックなことを導くことに、大変に長けている。J/ψの発見やニュートリノのように、一つの事象を発見し、そこから物理を拓いていく方法ではない。膨大な原子核データを集めてMagic Numberという事実を突き止め、Shell Modelでノーベル賞を貰ったMaria Goeppert-Mayer教授に通じる「帰納的手法」という共通点がある。もちろん、個人差の方が大きいかもしれないが、脳科学で研究されている女性の脳構造に起因しているかもしれない。脳科学の研究によると、女性は右脳と左脳をつなぐ脳梁(のうりょう=神経線維の集まり)が太く、両方の脳を切り替えるスピードが速いため、複数の現象を俯瞰的に捉えて、上手に切り替えながら統合できる能力を有するということである。

話は変わるが、私は、1973年から、途中で5年くらい日本にいたが、総計

で20年ほど米国で研究生活を送った。最初は10名位の小さなグループからスタートした。女性研究者はライフイベントのため出入はしていたが、常にグループには数名の女性が在籍していた。そして20年近く経過して、私が代表者となったグループは約300名の大グループに発展した。その頃、数日に亘る共同実験者の間のミーティングがあり、スピーカーの数を勘定したところ、女性研究者が30%であった。さらに、スピーカーの半分が女性であったような印象を受けた。彼女らの俯瞰的な講演による存在感のためであったと感じている。また、様々な委員会に出席しても多くの女性が常に参加していて、大変活発に発言をしていた。1970年前半から25年間で、米国の、特に私の周辺では、男女比率が30%に近づいていったと思う。

このように進んだ経験をした反面、1940-50年代、米国でもかなり女性差別があったと聞いている。私がそのポストを引き継いだC. S. Wu教授は、パリティ非保存の実験で有名になった女性物理学者である。同僚の先生の話では、当時、「女性は物理ができない」という信念を持つ男性物理学者もおり、そのためC. S. Wu教授も女性物理学者というだけで、手狭なオフィスしか与えられなかったり、昇進に反対されたり、データに不信感を持たれたりしたそうである。C. S. Wu教授とは10年間、色々な形で食事や講義、等々で付き合った。私がJ-PARC建設のために帰国した直後の1997年2月には、残念ながら他界された(追悼記事は、日本物理学会誌52(1997)660に掲載されている。そこにも昇進が遅かったと書かれている。)

さらにさかのぼって、1940年代前半、ノーベル物理学賞(1963年)を受

賞された前述のM. G. Mayer教授も、不遇な待遇を受けていた。夫婦一緒に働くべからずというしきたりがあったため、彼女の夫はコロンビア大学の化学教室の教授であったが、彼女には、近くの物理教室の部屋は与えられたものの、何もポジションが与えられなかった。その後、シカゴ大学で夫婦両方にProfessorのポジションを与える制度ができ、彼女はシカゴ大に移った。しかし、そこでも、夫婦両方が給与を貰うことはできず、奥さんのMayer教授は無給であったそうである。シカゴ大でFermi教授に会い、その後、ノーベル賞に繋がる仕事生まれている。

私も、1997年に日本に戻り、色々な委員会や幹部会に参加して驚いたのは、女性研究者がほとんどおられないこと、また、おられても、皆さん静かで、発言も少なかったことであった。それから17年、今日ではかなり改善されたとはいえ、やはり、日本は欧米に比べ、大変に遅れているという実感を持っている。これは、物理学分野に限らず、日本人に根差す社会現象なのかもしれない。たとえば、欧米で実施されている男性の育児休暇等の活用も少ない。

2013年7月に、アジア太平洋物理会議(APPC12)が日本の幕張で開催された。その折、男女共同参画推進委員会の分科会が持たれ、私も講演を行った。その際、日本は先進国の中では、科学者全体で女性の占める割合が14%と最低で、今後、30%と欧米レベルに持っていく必要があることを述べた。また、欧米に比べて半世紀遅れてはいるが、日本でも多くの女性研究者が、あたり前に研究に取り組み、男女ともに物理学の発展に寄与できる社会であって欲しいとも発言した。そのためには、冒頭に述べたように、女性研究者が、複数の現象を俯瞰的に捉え、統合できる優れた能力を、学問に最大限生かすのも良いかもしれないと考えている。

(文責：永宮正治、
2014年10月24日原稿受付)